

主日礼拝8月14日(日)

題 「サラの娘となる」

テキスト：ペトロの手紙I 3章1～7節

皆さん、おはようございます。

明日8月15日は、77年前日本が行った戦争が、敗戦によって終了した終戦記念日です。今年は2月に始まったロシア軍によるウクライナへの突然と思える侵略行為によって世界に戦争への不安と危機感が募っています。プーチン大統領の核兵器の使用も辞さないという愚かなことばに世界中が不安の中にあるかのようです。そのような中で今年は終戦記念日を迎えています。

今年は子どもの頃聞いたことのある「長崎の鐘」という歌を思い出しました。

歌：藤山一郎。

作詞：サトウハチロー

作曲：古関裕而、この方はNHKの朝ドラの主人公でした。

この歌の詩は、長崎の原爆で被害に遭われた医者の方の永井隆(たかし)博士の『長崎の鐘』という本を参考にしてサトウハチローさんが作詞したと言われています。ご存知の方も多いたと思いますが、次のような歌詞です。

こよなく晴れた 青空を
悲しと思う せつなさよ
うねりの波の 人の世に
はかなく生きる 野の花よ
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

召されて妻は 天国へ
別れてひとり 旅立ちぬ
かたみに残る ロザリオの
鎖に白き わが涙
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

こころの罪を うちあけて
更けゆく夜の 月すみぬ
貧しき家の 柱にも

気高く白き マリア様
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

大学教師の吉海直人（よしかいなおと）さんのこの歌が生まれた解説がありますので紹介いたします。

吉海さんの故郷は長崎です。吉海さんは語っておられます。異国情緒豊かな長崎には、ご当地ソングがたくさんありこれは昭和 24 年に『長崎の鐘』という本をもとに作られたものです。サトウハチロー作詞・古関裕而作曲で、藤山一郎が歌って大ヒットしました。そのため翌年には松竹映画として映画化もされています。昭和 26 年 1 月 3 日に放送された第一回紅白歌合戦では、トリとしてこの曲が歌われました。

さて私は、10 数年前に爆心地に近い上野町にある「如己堂（にょこどう）」を見学するため、故郷を訪れました。わずか二畳一間の小さな「如己堂の「如己」は、「己の如く他人を愛せよ」という意味で、聖書の一節（ルカ 10 章 27 節、またはローマ 13 章 9 節）から取られたものです。その「如己堂」には永井隆博士が住んでいました。この永井隆こそは、映画「長崎の鐘」の原作者です（朝ドラ「エール」では永田武で登場）。『長崎の鐘』は、書名からおわかりのように、長崎に落とされた原子爆弾のすさまじさが綴られています。彼は原爆で最愛の妻を亡くし、自らも長崎医大で被爆しただけでなく、右側頭動脈切断（うそくとうどうみゃくせつだん）というひどい傷を受けていました。

私は最初軽い気持ちで、東京出張の折にこの本を携え、新幹線の中で読んだのですが、読んでいるうちに涙が溢れ出てきたので、恥しくなって本を閉じてしまった経験があります。原爆によって灰塵に帰した長崎では、原爆で死んだ人は地獄に落ちると言われたそうです。また原爆はうつると言われ（風評被害）、かろうじて生き残った被爆者は差別を受けました。やっとの思いで復員してきた人も、家族や家を失って生きる希望をなくしていました。

永井隆は自ら被爆していたにもかかわらず、医師としてすぐに救護班を組織し、多くの被爆者達の応急手当を行っています。そのため妻の緑さんの安否を確かめる暇もありません。手当が一段落したので、ようやく家に帰ってみると、もちろん家は原爆で無くなっていたのですが、かつて台所があったところで、黒く焼けて塊(かたまり)と化した緑さんの亡骸を発見しました。その亡骸の傍らには、緑さんが愛用していたロザリオが落ちていたそうです。

「長崎の鐘」とは、浦上天主堂にかかげられていた、お祈りの時刻を告げるアンゼラスの鐘のことです。原爆投下の翌日に天主堂が炎上した際、50 メートル

の高さから落下したにもかかわらず、ひび一つ入らずに無事に掘り出され、その年のクリスマスの日から、再び平和の鐘として鳴らされています。永井隆は昭和 26 年 5 月 1 日、白血病悪化により 43 歳の若さで亡くなりました。市営坂本国際墓地に妻の緑さんと一緒に埋葬されています。その墓の石板には、「われらは無益なしもべなり。なすべきことをなしたるのみ」(ルカによる福音書第 17 章 10 節) と刻まれているとのこと。

さて、毎週学んでいるペトロの手紙の今日の個所には、夫婦関係のことが記されています。この個所は、昔、教会の結婚式の時に良く読まれていた個所です。結論的に言えば、異教徒である夫を持つキリスト者の妻との夫婦愛に関する教えであると言えます。

妻が夫に従うようにとの言葉が強く、現在では若い人々には特に受け入れにくい言葉になっていると思われます。このことは今から約 2000 年前の国・社会では当然のことだったのです。今では考えられないことですが、女性と子どもは地域の集団や社会の正式な構成員、メンバーとは認められてはいなかったのです。教会でも、昔は男性と女性の座る席が違っていたとか、役員はほとんど男性だけであったとか聞いてきました。現在では考えられないことです。そのようなことが、聖書の一か所をことばを根拠にして変わることはない教えとして利用され使われる場合もあったのです。

当然のことですがイエスさまを信仰生活の土台とすることは変えることはできませんが、聖書のことばの個々のことばの解釈や理解は、時代と共に、社会状況や学びの中で神さまの導きによって変わっていく可能性はあるのだと思えます。

さて今日の聖書の個所 1 節には「1:同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい。夫が御言葉を信じない人であっても、妻の無言の行いによって信仰に導かれるようになるためです。」とあり、ここではやはり「従いなさい。」ということばが目に入りますが、その理由は、「夫が信仰に導かれるために」ということです。「妻の無言の行いによって信仰に導かれるようになるためです。」

妻が信仰に導くこともあれば、夫が妻を信仰に導くこともあります。親が子を、子が親を導くこともあるのです。神さまの愛の働きです。

「2:神を畏れるあなたがたの純真な生活を見るからです。

また、「3:あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。4:むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです。このような装いこそ、神の御前でまことに価値があるのです。」とあり、

昔は、この言葉をもとにして、教会内では女性の服装や、身に着ける装飾品

を見て注意する牧師もいたようです。聖書が語ることは、時代背景もあるとは思いますが、外面的な服装のことではなく、「内面的な人柄」の大切さのことだと思います。人は外側を見るが神さまは心の内を見られるのです。練られた品性を少しでも身につけたものです。余談ですが、最近「老いの品格」という本が出版されました。年を重ねるごとに心の品格もみがけたらと思われました。それは態度や、言葉や、立ち振る舞いにもおのずから出てくることなのでしょう。

「5:その昔、神に望みを託した聖なる婦人たちも、このように装って自分の夫に従いました。6:たとえばサラは、アブラハムを主人と呼んで、彼に服従しました。あなたがたも、善を行い、また何事も恐れなければ、サラの娘となるのです。」「サラの娘」とは「サラの子どもたち」のことです。サラという女性のことが語れています。サラは信仰の父と言われるアブラハムの妻です。旧約聖書の創世記12章(P15)以下に記されていることですが、今から3900年ほど前、サラはアブラハムと共に、神の声に従い生涯をかけて長い旅を続けました。サラは赴任の女といわれ長く子が産まれませんでした。後に産まれますが、子どもを巡る問題で苦しみ抜いた女性でした。時には、夫であるアブラハムとの夫婦の危機も経験しています。

アブラハムもサラも人間的には失敗も起こしました。

ある時サラは「子が産まれる」という天の使いの声を聞きますが、もう年老いていたので、そのことばを受け入れることはできず、「ひそかに笑った。」こともありました。これはサラの犯した神への不信行為でした。しかしついには二人は、天と地をつくられた神さまを信じて生きる者へと変えられ、神に委ね従う心を持って人生を送ったのです。今日の夫婦に関する教えの聖書箇所は、過去や現在、未来の「夫婦関係というものを思い直す、見つめ直す、捉えなおす」箇所でもあるようにも思われたのです。神の憐みと導きの中で、アブラハムとサラの人間的限界を超えて、このサラから独り子イサクが生まれました。後にヤコブ、ヨセフとイスラエルの歴史が続いて行きました。そして多くの息子、娘たちが広がって行ったのです。人間的に見ればイエスさまもその中に生まれたのです。神の愛に包まれた娘、息子たちが続いて行ったのです。サラは時至ってアブラハムの備えたカナン地方のマクペラの洞穴に丁寧に葬られました。愛する妻の葬りの備えのために、アブラハムは思いと知恵と力を尽くしたのです。世界中すべての人は神の愛によって、神の子として生まれたのだということも思っていて、たとえ違いはあっても、互いに尊敬し合い、生きて行きたいものです。平和を求める鐘の音は今も鳴り続けているのです。

主の平安を祈ります。